

指示詞の使用と省略可能性に関する日中対照研究（要約）

—裸の名詞の解釈を手掛かりに—

陳 嬾如

第1章 序論

日本語の指示詞はコソアの3項対立であるが、中国語は「這(zhe)」と「那(na)」の2項対立である。コソアと「這」「那」は1対1の関係ではなく、場面や文脈によって、すべて対応可能であることが指摘されている(迫田1997、加藤2008)。さらに、コソアもしくは「這」「那」に対応する指示詞が現れない場合もある。

日中対訳作品を分析した加藤(2008)では、指示詞の非対応関係が全体の5割近く観察されたことが示されており、指示詞の対応関係と同様、非対応関係も数多く存在することが示唆される。しかし、両言語の指示詞の非対応関係については部分的にしか検討されておらず、その実態の全体像について明らかにする必要がある。そこで、本研究は、なぜ指示詞が使用されるかではなく、なぜ指示詞が使用されないか、特に、なぜ指示詞が省略できるかに着目し、日中両言語の異同を明らかにすることを目的とする。

第2章 先行研究

本章では、日本語と中国語における指示詞の使用・不使用に関する先行研究を概観した後、両言語の指示詞の非対応関係、指示詞の省略可能性に関する問題点、および本論文の研究課題について述べた。

先行研究の主な結果として、日本語では、先行詞と照応詞の意味論的タイプが一致する時(庵2007)、普通名詞のような指示対象の定性が高い時(史2008)、人名詞のような指示対象の個性が高い時(岩田2006)などに、指示詞の省略が可能となると指摘されている。それに対し、中国語では、名詞は定性が低いため、普通名詞でも抽象名詞でも、先行詞と同じ個体を指すのに、指示詞の省略ができないと述べられている(史2008)。

- (1) a. 私は犬を飼っていた。しかし {その/Ø} 犬は死んだ。
b. 我 養過 一隻狗。但是 {那隻/*Ø} 狗 去年 死了。
私 飼っていた 一匹 犬 しかし その 犬 去年 死んだ

(史2008: 65、逐語訳加筆)

- (2) a. 私は今ある言葉を習っている。{その/*Ø} 言葉は難しく大変だ。
b. 我 在學 一門語言、{那門/*Ø} 語言 很 難 學起來 很辛苦。
私 学んでいる 一つ 言語 その 言語 とても 難しい 学ぶには 大変

(庵2007、史2008による中国語訳、逐語訳加筆)

また、庵(2007)は、日本語のような定冠詞を持たない言語では、テキスト内で2度目以降に出

現した名詞句は潜在的にマーカーなしで表すことが可能であると述べている。それに対し、英語のような定冠詞を持つ言語では、必ず何らかのマーカーが必要であるとしている。つまり、定冠詞を持たない言語は潜在的に指示詞の省略ができるということである。

しかし、以下のような問題点が残されている。

(a) 日本語と中国語の指示詞にどのような非対応のパターンがあるかが明らかになっていない。

先行研究では、指示詞の「使用による非対応」と「不使用による非対応」を区別せず、同等に扱っている。本論文の研究対象の範疇を絞るためにも、両言語の非対応パターンを再検討する必要がある。

(b) 日本語における指示詞の省略に関して、指示対象の名詞の性質と叙述の類型による影響とのかかわりが明らかになっていない。

日本語の指示詞に関しては、指示対象の名詞の定性が省略に影響を与えると指摘されている（庵 2007、史 2008）。しかし、定性が低いとされる抽象名詞でも指示詞の省略が可能な例もあれば、定性が高いとされる普通名詞でも省略可能な場合とそうでない場合がある。先行研究の指摘は指示詞の省略現象をある程度説明できるが、包括的なものではない。

(c) 中国語における指示詞の使用と省略に関して、日本語とどのような違いがあるか、なぜその違いが生じるのかが明らかになっていない。

庵（2007）の説明からは、定冠詞という統語的マーカーがない中国語でも指示詞の省略が可能であると予想される。しかし、史（2008）では、中国語の名詞は定性が低いいため、抽象名詞、普通名詞を問わず、指示詞による限定が必要であると指摘されている。史（2008）の指摘が正しければ、庵（2007）の説明を修正する必要がある。

第3章 日中両言語における指示詞の非対応パターン

本章では、同じ非対応の現象でも、先行研究により分類が異なっているという問題点を取り上げ、両言語の指示詞の非対応関係を再整理する必要があることを指摘した。

日中対訳作品に現れた指示詞を分析した中（1990）と加藤（2008）は非対応例の分類に留まり、どのような原理に基づき非対応関係が生じるかについては論じていない。胡（2006）では、非対応関係を「構文的」と「語彙的」という側面から分類を行っているが、それは日本語の特徴によるものなのか、中国語の特徴によるものなのかは不明である。そのため、指示詞が使用されていない箇所、指示詞で置き換えられるかという観点から、非対応のパターンを見直す必要がある。分析の結果、以下のような非対応関係が観察された。

1) 指示詞の使用による非対応

日本語の独自の特徴による非対応

中国語の独自の特徴による非対応

2) 指示詞の不使用による非対応

ほかの語彙の使用による非対応
省略による非対応

日本語／中国語の独自の特徴による非対応関係は、先行研究である程度明らかになったが、指示詞の不使用による非対応、特に省略による非対応に関しては、明らかにされていない点が多く残されている。

第4章 日本語における指示詞の省略

本章では、日本語における指示詞の省略可能性に関して、指示対象の名詞の種類と叙述の類型による影響の観点から検討した。

課題1：叙述の類型（事象叙述・属性叙述）が指示詞の省略可能性にどのような影響を与えるか。
名詞の定性（普通名詞・抽象名詞）とのかかわりについて分析する。

課題2：同じ叙述条件において、名詞の個性（人名詞・生物名詞・もの名詞）の違いが指示詞の省略可能性にどのような影響を及ぼすか。

分析の方法は、先行研究の指摘、および用例の観察で得られた結果に基づき、予測を立てる。さらに、日本語母語話者による許容度の5段階評定法のアンケートを用いて検証する。

課題1：叙述の類型による影響

用例分析と日本語母語話者15名を対象に実施した5段階評価アンケートの結果、次のことが明らかになった。1) 普通名詞でも、時間的制約を受けない「属性叙述」の述語がつくと、指示詞の省略可能性が下がる。時間軸のどこかで発生する動的出来事を表す「事象叙述」の述語がつくと、指示詞の省略に対する許容度が上がる。2) 抽象名詞のうち、裸の名詞で個別指示を指すことができる抽象名詞（以下、抽象名詞Ⅰと呼び、それ以外の名詞を抽象名詞Ⅱと呼ぶ。）は、事象叙述の述語がつくと、普通名詞と同じように指示詞の省略が許されることがかわった。

(3) 指示詞の省略可能性（括弧は許容度が低い項目を示す）

普通名詞・事象叙述 > 抽象名詞Ⅰ・事象叙述

(> 普通名詞・属性叙述 > 抽象名詞Ⅱ・属性叙述)

普通名詞でも、叙述の類型により、指示詞が省略できない場合がある。また、特定の抽象名詞は事象叙述の述語がつくと、抽象名詞と同じように指示詞の省略が許される。これらのことから、先行研究で言及された名詞の定性の違いだけではなく、叙述の類型も名詞の解釈、また指示詞の省略に影響を及ぼすと言える。

課題2：名詞の個性による影響

岩田（2006）は個性が高い人名詞の場合は、個性が低い生物名詞、もの名詞の場合より、裸の数量詞で先行詞を追跡することができる」と述べている。そのため、指示対象が普通名詞の場合でも、個性の高い名詞の方が指示詞の省略可能性が高いと予想できる。日本語母語話者（23名）

を対象に自然さの5段階評価アンケートを実施した結果、次のことがわかった。

すべての調査項目において、指示詞の使用（以下、「その+N」）が自然と判定されている。分析した例に限って言えば、人名詞・生物名詞の方はもの名詞より指示詞の省略（以下、「 \emptyset +N」）に対する許容度が高いと考えられる。

(4) 指示詞の省略可能性：人名詞 \geq 生物名詞 $>$ もの名詞

課題2の結果から、照応詞が数量詞の場合だけではなく、普通名詞の場合でも、個性が高い人名詞の方が、指示詞の省略に対する許容度が高いということが言える。一方、指示詞の有無を問わず、照応詞が複数の形式（その+名詞複数形（以下、Npl）／それら+N/ \emptyset +Npl）に対する許容度が低いという結果も得られた。この点については、第6章の総合考察で取り上げて検討する。

第5章 中国語における指示詞の省略

本章では、中国語における指示詞の省略可能性について調べた。定冠詞を持たない言語という側面に関しては、中国語は日本語と同じである。庵（2007）の指摘が正しければ、中国語でも指示詞の省略が可能であろう。史（2008）では、中国語の場合、抽象名詞と普通名詞とともに指示詞の省略ができないと指摘されている。しかし、本研究の分析から、先行詞が「一+X」という単数の量詞で限定されなければ、照応詞につく指示詞の省略が許される場合もある。よって、第5章では、指示対象の数量（課題1）、叙述の種類（課題2）そして名詞の個性性による影響（課題3）という課題を設け、分析を行った。

課題1：先行詞の数的違いが指示詞の省略可能性に影響を与えるか。

課題2：中国語における指示詞の省略可能性は、叙述の種類の違いによって異なるか。

課題3：中国語における指示詞の省略可能性は、名詞の個性性の違いによる影響が現れるか。

課題1は、母語話者の選択の傾向を見るため、多肢選択アンケートを用いた。課題2と課題3においては、各選択肢に対する許容度を調べるために、5段階評価アンケートを使用した。主な結果は以下の通りである。

課題1：先行詞の数量の違いによる影響

普通名詞において、先行詞が単数のマーカー（一+X）で限定されない場合、つまり、先行詞が複数もしくは裸の名詞の場合、中国語でも指示詞の省略可能性が高くなるという傾向が観察された。庵（2007）の一般化を支持する結果が示されている。

課題2：叙述の種類による影響

叙述の種類を問わず、指示詞の省略に対する許容度が低い。言い換えると、指示対象が単数（一+X）の場合、後続文脈が個別指示を表す「事象叙述」でも、指示詞の省略ができない。

課題3：名詞の個性性による影響

先行詞が単数の量詞（一+X）で限定されない場合、中国語でも指示詞の省略が観察された。し

かし、先行詞と照応詞がともに裸の名詞の場合、名詞の個性性を問わず、多くの項目は自然ではないと判定されている。さらに、照応詞が裸の名詞の場合、許容度が低いのに対し、照応詞が名詞複数形の場合、指示詞の省略に対する許容度が上がる。このことから、中国語における指示詞の省略可能性は名詞の個性性以外の要因と関連すると考えられる。

第6章 総合考察

本章では、日本語と中国語における指示詞の可能性が異なる原因について、両言語における裸の名詞に対する数量解釈の違いとのかかわりという観点から考察する。

日本語の場合、人名詞、生物名詞、もの名詞を問わず、裸の名詞では、単数・複数とも共起することができるという指摘されている（仁田 1997）。その点については、中国語も同じである。しかし、裸の名詞に対する数量の解釈は、日本語母語話者と中国語母語話者が異なることが、第4章と第5章の調査で示された。

日本語では、指示詞の複数形に対する許容度が低いことから、先行詞の裸の名詞に対し、単数の読みの方が強いと考えられる。一方、中国語では、指示詞の単数形（那+X+N）と複数形（那些+N）に対する許容度に差がないため、先行詞の裸の名詞は単数と同程度に複数とも読み取られることが言える。

指示詞の省略可能性について、先行詞が単数（一+X）の場合、中国語では指示詞の省略に対する許容度が低い。その理由は、以下のように考えられる。

中国語の場合、文脈の助けがない限り、単数を表す時に、「一+X」という単数のマーカーを付けなければならない（奥津 1986、庵・張 2007）。照応詞が単数であることを表すには、単数のマーカーが必要であるが、「一+X」は先行文脈に現れた指示物を追跡して特定する情報量がないと指摘されている（Downing 1986、岩田 2013）。そのため、単数の情報が含まれる指示詞の省略が許されないと考えられる。一方、日本語においても、「一+X」だけで先行詞の単数名詞と同定できないが、裸の名詞で単数を表すことができるため、「その+N」と並びに裸の名詞も使用できるのである。

表 6-1：先行詞が単数の場合

先行詞	数量	照応詞
(日本語) 一人の学生	→	学生 (単数の先行詞を追跡できる)
		?? 一人の学生 (「一+X」には追跡機能がない)
		その学生
(中国語) 一名學生	→	?? 學生 (単数の先行詞を追跡できない)
		?? 一名學生 (「一+X」には追跡機能がない)
		那名學生

先行詞が裸の名詞の場合、照応詞の形式に対する許容度は次の通りである。

(5) 日本語：その+N > N > (それら+N > Npl)

中国語：那個+N = 那些+N > Npl > (N)

日本語では、裸の名詞に対して、単数と解釈しやすいため、照応詞に複数のマーカーが現れると、先行詞と数量的に一致しない可能性もある。それに対して、中国語では、裸の名詞で単数も複数も表すことができるため、照応詞にも裸の名詞が使用される場合、指示対象が単数か複数かが不明であり、必ずしも同じ対象を指しているとは限らない。照応詞に名詞の複数形を使用すると、先行詞の裸の名詞も複数として解釈されるため、指示詞を用いなくても、先行詞と同定できると考えられる。

表 6-2 : 先行詞が裸の名詞の場合

先行詞	数量	照応詞
(日本語) 男	単数 (複数) →	男 (先行詞も照応詞も単数と解釈) ? 男たち (数量的に一致しない)
(中国語) 男生	単数・複数 →	? 男生 (必ずしも同じとは限らない) 男生們 (先行詞が複数と解釈される)

第 7 章 本研究の結論

本研究では、先行研究で言及されている指示詞の非対応パターンを、指示詞に置き換えられるかどうかという観点で再整理した。その結果、次の 3 種類の非対応関係に分類できる。

- 1) 日本語での指示詞の使用による非対応
- 2) 中国語での指示詞の使用による非対応
- 3) 日中両言語とも指示詞の使用ができるが、一方の言語が指示詞の代わりにほかの語彙を使用するか、指示詞を省略することにより、非対応関係が生じる場合

指示詞の使用と省略可能性に関して、主な結果は以下の通りである。

表 7-1 : 日中両言語における省略可能性の異同

	日本語	中国語
先行詞の数量	指示対象の数量は、指示詞の省略可能性に影響を与えない。	指示対象が単数の場合、指示詞の省略可能性が低い。指示対象が裸の名詞か複数の場合、指示詞の省略に対する許容度が高くなる。
叙述の種類	後続文脈が事象叙述の場合、普通名詞と一部の抽象名詞 (裸の名詞で個体の指示対象を表せる抽象名詞) につく指示詞の省略が許される。	後続文脈が事象叙述でも、先行詞が単数の時、指示詞の省略可能性が低い。
名詞の個性	人名詞・生物名詞の場合がもの名詞より、裸の名詞で先行詞を追跡することができる。	指示詞の省略可能性が名詞の個性性以外の要因と関わる。照応詞が名詞複数形の場合、先行詞を追跡できる。

共通点：指示詞が省略できるかどうかは、両言語は共に裸の名詞に対する解釈に関わっている。

相違点：日本語では、名詞が個体指示として解釈されやすい度合いによって、指示詞の省略可能性も異なる。それに対し、中国語では、裸の名詞では単数も複数も可能であるため、先行詞と同定するのに、指示詞による指定、もしくは数量の指定が必要である。

参考文献

- 庵功雄（2007）『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- 庵功雄・張麟声（2007）「日本語と中国語の「冠詞」についての覚書」『一橋留学生センター紀要』10, pp.29-36. 一橋大学
- 岩田一成（2006）「日本語数量詞の代名詞的用法と場指示語」『日本語文法』6-1, pp.38-55.くろしお出版
- 岩田一成（2013）『日本語数量詞の諸相—数量詞は数を表すコトバか—』くろしお出版
- 奥津敬一郎（1986）「日中対照数量表現」『日本語学』5巻8号, pp.70-78. 明治書院
- 加藤晴子（2008）「中日対訳コーパスにみる「こ、そ、あ」と”这、那”の非対応」『明海大学大学院応用言語学研究』No.10, pp.117-127. 明海大学
- 胡俊（2006）「日本語と中国語の指示詞についての対照研究—文脈指示の場合—」『地域政策科学研究』3, pp.1-23. 鹿児島大学大学院人文科学研究科
- 迫田久美子（1997）「中国語話者における指示詞コ・ソ・アの言語転移」『広島大学日本語教育学科紀要』第7号, pp.63-72. 広島大学
- 史雋（2008）「文脈における日中指示詞の対照研究」『一橋大学留学生センター紀要』11, pp.65-77. 一橋大学
- 中みき子（1990）「小説における日・中指示詞の機能の差異について」『研究論叢』35, pp.278-287. 京都外国語大学
- 仁田義雄（1997）『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—』くろしお出版
- 益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版
- 益岡隆志 編（2008）『叙述類型論』くろしお出版
- Downing, P. (1986) The anaphoric use of classifiers in Japanese. In C. G. Craig (ed.) *Noun classes and categorization*. pp. 345-375. John Benjamins.